

捕獲した鹿 活用へ

来年度、分類・保管施設整備

丹波市有害鳥獣対策協議会(会長 深田晋三・市猟友会長)は、捕獲した鹿を集中的に受け入れ、食肉用やドッグフードの原料などに分類し保管もできる有効活用処理施設を、2013年度、市内に整備し運営する。市は施設整備の補助に2600万円を当初予算案に計上。完成すれば全国でも例のない施設として注目されそうだ。

(田中聡)

丹波市有害鳥獣対策協

協議会は猟友会と農業委員、森林組合、JA丹波ひかみ、丹波市などで構成。処理施設の設置、運営に際しては、市内にある鹿肉の加工販売業者や鹿肉料理のレストラン、鹿の内臓などを活用したドッグフードの製造業者などにも協議会に加わってもらう。

年間約3万頭の捕獲を続けている。同市内でも年間1500〜2200頭を捕獲しているが、鹿肉などに有効利用されるのは200頭程度しかなく、大半は山に埋められているのが実情。処理施設は、捕獲した鹿を一か所に集中的に集め、ロースやモモなど食肉にする部分や、皮や角など工芸品に利用する部位、ドッグフードの原料になる内蔵な

どに仕分けし、市内の関連業者に安定して大量に供給する。鹿を処理施設に搬入した猟師らに対しては、市が独自に補助金を出す予定で、13年度は総額で600万円を充てる。年間約1000頭を受け入れる方針で、市農業振興課では「安定した頭数を確保することで、鹿の需要を拡大し市の特産に育てたい」と話している。

同市氷上町、鹿肉の加工販売会社「丹波姫もみじ」の柳川瀬正夫社長(63)は「捕獲した鹿すべてを搬入する施設ができれば加工製品の価格低下も期待できる」と話している。

加工業者、料理店など運営

県内では鹿による農業被害が年間4億3500万円にも上っており、10年から